

今回は、電気自動車の動向についてお伝えします。

## 各国の電気自動車(EV)の動向

### ■ ヨーロッパの状況

今年に入ってドイツ政府が欧州連合(EU)に対して、2035年以降に欧州域内で「e-fuel」を使用する新車販売について認めるよう要望を提出しました。要請した修正案は「Fit for 55」という欧州議会が欧州グリーンディール政策の一環として採決した重要な規制に対してです。「Fit for 55」により、2035年時点で欧州域内において販売可能な乗用車と小型商用車はZEV(ゼロエミッションビークル)になります。これに対してドイツはHV車やPHV車を含めたe-fuelを認めるべきという姿勢を改めて示したのです。EVシフトが進むヨーロッパでも戦略を修正し、2035年以降もエンジン車の新車販売が「条件付き」で認められます。e-fuelとは、大気中のCO2と再生可能エネルギーを使って水を電気分解して得られる水素を用いた合成燃料です。

### ■ アメリカの状況

米国におけるEV車は依然として自動車販売量のわずかに一部にすぎませんが、欧州と中国では大きくシェアを伸ばしています。2022年度のBEV世界販売ランキングでは、米テスラが131万4000台で圧倒的1位で2位,3位が中国、4位が独フォルクスワーゲンと続きます。バイデン政権下ではPHVもEVに含め、2030年までにEV化率50%以上とする大統領令が出されました。これにあわせてビッグ3がEVシフトを加速していくことでしょう。そんななかテスラが2023年、ライバルメーカーに対する値下げ戦略を続けています。(BEV=Battery Electric Vehicle , 100%電気で動くEV)

### ■ 中国の状況

中国政府が認定する「新エネルギー車」とは①EV ②PHV ③FCV=Fuel Cell Vehicle です。政府は、習近平国家主席が2020年9月の国連総会で「2030年までにCO2排出量をピークアウトさせ、2060年までにカーボンニュートラルの実現を目指す」と決意表明を行い、EV充電インフラの急速な拡充や、補助金の支給、車両購入税の免税などの支援措置を行うことでEV普及を進めています。背景には「新エネルギー車」の技術開発に集中投資し、世界の自動車メーカーを一気に飛び越して主導権を握る狙いもあるようです。EV市場は中国を中心に回っているとも言われ、高い技術力を身につけた中国ですが、補助金が昨年末に終了したこともあり消費者はEVを買い支えるのが今年が勝負の年になるかも知れません。

### ■ 日本の状況

政府は2035年までに乗用車新車販売における電動車の比率を100%とする目標を掲げています。それに伴い、今後日本ではガソリン車の新車販売ができなくなるため、自動車メーカーもEV化を進めています。日本のメーカーはハイブリッド車を重視する戦略を取ってきたのでEVシフトは遅れた感がありますが、EVの販売比率は急激に上昇しており、現在のEV及びPHVの新車販売比率は4.0%台前後を維持しています。経済産業省は昨年12月に補助金の延長を決定しましたので、2023年も補助金の後押しでさらに市場にEVが増えると思われます。欧州や中国のように、EV補助金の強化や税金の優遇措置を行うとともに、EV充電インフラの拡充も進めており、今後さらにEV普及が進んでいくことが予想されます。

### ■ EVシフトの課題

各国で本格的に進み始めているEVシフトですが課題もあります。EV車からは、走行中にCO2は排出されませんが、そもそも発電時のCO2排出量を減らさなければ、EVシフトによる脱炭素化に十分な効果を得ることはできません。つまり、EVシフトは、発電における再生可能エネルギーの導入促進など、発電所における脱炭素化とあわせて考える必要があります。また、EVの急速充電設備の整備も課題です。さらにはEVシフトによって自動車部品生産を行っていた国内中小企業への影響も大きく、これによる日本経済へのダメージは避けられません。EVシフトは経済的ダメージとバランスを取りつつ進めていく必要があります。

## (その他)コロナ5類移行後の様子

5月8日から5類に移行しましたが、各報道によると移行後は観光地や繁華街の人出が増えておりコロナ前の日常が戻りつつあることが感じられます。訪日外国人観光客も増えており景気回復への期待が高まります。また、事業活動の面では対面営業の増加や現場作業がしやすくなるといったことも挙げられます。労働環境でも懇親会の増加、テレワークの減少など接触機会が増えることを期待する声も多いようです。2020年から3年間も社会活動の制限が続いただけに、制限緩和が経済活動にプラスに働くと期待する声が多いものの、コロナの不安が完全に消えたわけではないので、企業は期待しながらも慎重に受け止めようという意識も働いていることが伺えます。